

2018年1月28日（日）「自由を得させる律法」

マタイ 15:1-9

1 そのころ、パリサイ人や律法学者たちが、エルサレムからイエスのところに来て、言った。  
2 「あなたのお弟子たちは、なぜ長老たちの言い伝えを犯すのですか。パンを食べるときに手を洗っていないではありませんか。」

3 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「なぜ、あなたがたも、自分たちの言い伝えのために神の戒めを犯すのですか。4 神は『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をのしる者は死刑に処せられる』と言われたのです。5 それなのに、あなたがたは、『だれでも、父や母に向かって、私からあなたのために差し上げられる物は、供え物になりましたと言う者は、6 その物をもって父や母を尊んではならない』と言っています。こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしていきました。7 偽善者たち。イザヤはあなたがたについて預言しているが、まさにそのとおりです。8 『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。9 彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』」

【序論】

最近、子育てをするようになりまして、人生における一つの問いが自分の中に生じてきているのにふと気づきました。長男が小学校で教わってきた漢字を練習し、計算式を一生懸命解いている。長女が幼稚園で覚えた暗唱聖句や新しい賛美を大きな声で聞かせてくれる。子どもというのは、まだその人生が真っ白なキャンパスでありますから、新しい絵がそこに描かれていくときに、実に生き生きとしているのです。この新鮮な感覚が羨ましいと感じる。「知らない」ということにコンプレックスを抱くこともなく、ただ新しいことを知った喜びに溢れているのです。人は大人になると、日々の生活を回していくことで手一杯になり、発見の喜び、ワクワクする心のたぎりを失っていきやすい。

（個人差はありますが）何か「知らない」ことがあると、それを恥ずかしいことのように思ってしまう。大人と子ども、まことに大きな違いであります。そう言えば、天国とは「子どもの国」と呼ばれるところでありまして、この永遠の御国ではすべてが新しく、誰もが神様のお造りになったものを見出す喜びに満ち溢れているのでしょう。

私が時に怖くなりますのは、聖書を読むことにおいて、この子どものような感覚を自分が失ってはいないかということです。御言葉に慣れ親しむことは大切ですが、そこに発見の喜びを失った読み方をしていく危険性があるのです。特に御言葉を取り次ぐ立場

にある人は気をつけなくてはなりません。毎週やってくる日曜日に向けて、説教を作らなくてはならない。日曜日の奉仕を終え、144 時間経つと、次の主日がやって来ます。そうなりますと、牧師は職業的に聖書を読むようになっていくかも知れません。説教を作るための一連の作業をして、どうにか形を整え、講壇に上がるのです。このような「形だけ」の「仕事」を続けていますと、御言葉が本来持っている、人を激しく揺り動かし、造り変える力が損なわれていきます。これは、時間という制約の中で生きているすべての牧師が常に問われていることでしょう。そして、もちろんのこと、この宗教の形骸化は、すべての礼拝者が気をつけなくてはなりません。私たちは今日の礼拝に向けてどういう備えをしてきたか。神とお出会う楽しみ、喜びを抱きながら教会に足を向けていたか。今、一人一人に問われていることなのです。

## 【本論】

### 本論 1. 言い伝えの違反

そのころ、パリサイ人や律法学者たちが、エルサレムからイエスのところに来て、言った。

(15:1)

「パリサイ人と律法学者」はよくセットで登場しますが、イエスに対する批判者の通称とも言えます。この頃、ユダヤの首都エルサレム（つまり最高議会）から、最近噂になっているイエスの活動を調べ、監視するために使節が派遣されました。イエスの言行が正当的なユダヤ教とかけ離れているため、異端としての証印を押すためです。パリサイ人というのは、信徒として聖書を研究している立場にありますから、エルサレムから正式に派遣されるための権限を持っていたとは考えにくい。派遣されたのは律法学者で、地元にはいたパリサイ人が彼らに合流したものと思われる。

「あなたのお弟子たちは、なぜ長老たちの言い伝えを犯すのですか。パンを食べるときに手を洗っていないではありませんか。」(15:2)

彼らはイエスを訴えるために、弟子の行動を見張りました。その一つの方法として「洗い」の問題が取り上げられます。イエスも弟子たちも食前の「手洗い」を怠っていたからです。ここで言われている「手洗い」とは、私たちが普段行なっている衛生上の「手洗い」ではありません。宗教的な意味における「穢れ」を洗い落とすための儀礼です。

「まず、食前の洗いに使う水を用意した。その最少の量は卵の殻に入るだけの水量の一倍半だった。それをまず両手にかけて、指先を上に向け、水を手首からひじに落とす。汚れた手に触れた水は汚れたものとなるので、それがもとに戻って、きよめた部分を再び

汚さないようにする。次に指先を下にして反対の方向から水をかけ、最後に片手ずつ、反対の手のこぶしでこすってきよくする。」(中澤《中》 pp. 421-422)

きよめの規定は、元々祭司がいけにえをささげる前に行なうべきものとして定められていました(レビ 22:4-7)。しかし、後のユダヤ教はこの規定を一般人にも食事ごとに守るよう定めたのです。市場では異邦人と接触するため、穢れが身に付いているかも知れない。穢れた手で食べ物を触れば、その穢れが体の中に入るかも知れないと、食前、(時には食中、)食後に手を洗うよう教えました。因みに、このような一般人への規定は、主イエスの時代のほんの少し前に導入されたようで、言わばユダヤ人の間でホットな話題だったのです。

ユダヤ人はオールタイムで神に喜ばれる生き方をするために、このような細かな律法解釈をおびたしく作り出しました。そして、パリサイ人はこの「言い伝え」に聖書の律法と同等の権威を与えたのです。

さて、ここで一つの問題が浮かび上がってきます。神は元々、律法を何のためにお与になったのか。律法の目的とは、「このように生きれば幸せになれるよ」という、本来の人間の生き方を示していくところにありました。人間は思いのまま、欲望のままに生きる時、不幸になっていくのです。律法はその意味で、神の民にその生き方を問い、真の自由とはここにある、神の御心に従う時に人は自由になるということを提示するものでした。「汝、姦淫するなかれ」という戒め一つを取っても、姦淫が家庭を崩壊し、夫婦関係も親子関係もめちゃくちゃにするということを、誰もが知っているでしょう。神が律法をお与えになった目的は「自由」を得させるところにあった。ところが、その律法をもって、人間は自ら不自由になる道を作り出してしまったのです。それが「律法主義」と言われるもの。ユダヤ人が陥った、律法の表面を守り、それによって義とされようとする生き方。形骸化した宗教であります。次に見ていく主イエスの反論は、彼らの問題の核心を突いています。

## 本論 2. 敬虔を装った偽善

そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「なぜ、あなたがたも、自分たちの言い伝えのために神の戒めを犯すのですか。神は『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をののしる者は死刑に処せられる』と言われたのです。それなのに、あなたがたは、『だれでも、父や母に向かって、私からあなたのために差し上げられる物は、供え物になりましたと言う者は、その物をもって父や母を尊んではならない』と言っています。こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしまいました。(15:3-6)

主イエスは彼らの訴えに対して毅然と反論します。主イエスにとって重要なことは、神の戒め（律法そのもの）に従うことであって、「言い伝え」ではありません。ここで主は、彼らの訴えに直接お答えにはならず、別の問題を持ち出して質問をしておられます。このような答弁の仕方は、当時のラビたちの間で一般的でした。

ここで主が持ち出されたのは、当時まかり通っていたユダヤ人の悪しき伝統でした。息子は成人した時、両親を経済的に助けることで、親を敬うべきだとされていた。しかし、親子関係が良くない場合でしょう、親を養うことを嫌がる息子もいたようなのです。これは定かではありませんが、収入の何割かを親のために蓄えるような約束事があったのかも知れません。反抗的な息子は、折角稼いだ金を親のために使ってなるものかと、自分のものにする抜け道をつくり出した。それが、マルコ福音書で「コルバン」と呼ばれるもので、親への分を神への献げ物としてしまえば、誰も手を出すことができなくなるのです。親子喧嘩などが生じた折に、「あなたへの取り分はコルバン」と宣言したら、それはもう神への誓いなので、取り消すことはできないとされました。こういうことを巡って、当時、親子間の裁判なども行なわれていたようであります。ある可哀想な父親は、息子の結婚式の時でさえ食事がありつくことができなかつたという実話も記録として残っているようです。ですから、両親は息子の「コルバン」という言葉を恐れて生きていた、そういう時代であります。

これは「敬虔」を傘に親の扶養を怠る人間の罪です。一見、神と両親のどちらが大切かという優先順位の問題のように見えますが、その中身は実にお粗末なものです。主イエスはこの悪しき伝統を十戒違反だと責めておられる。4節で引用されている「**あなたの父と母を敬え**」とは出 20:12（申命 5:16）の十戒第五戒、「**父や母をののしる者は死刑に処せられる**」は出 21:17（レビ 20:9）からの引用です。これらは神が明確にお命じになっていることで、人は最も基本的な生き方として守らなくてはなりません。

### 本論 3. 人は気づかずに偽善者となる

偽善者たち。イザヤはあなたがたについて預言しているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拜んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』（15:7-9）主イエスはイザヤ 29:13 の御言葉を引用し、それを彼らに直接当てはめておられます。このような律法主義は今に始まったことではない。遠い昔からあったことなのだ。イスラエルの民は、神がお与えになった戒めを一見愛しているように見えるが、実のところ抜け道ばかり探し出し、律法の心を捨て、表面ばかりを行なってきた。それで本当に神

を愛していると言えるのか。その心は遠く神から離れ、形だけの宗教を満喫しているのではないか。

皆さん、この主の御言葉は私たちの心にも問いかけるものではないでしょうか。私たちは「キリスト者」というとてつもない称号をいただきました。しかし、実際の生活を見る時に、それにふさわしい生き方ができているか。私たちは確かに、毎週の礼拝を大切にし、日々のディボーションを欠かさず、人前ではそれなりの祈りをささげることができるようになったかも知れません。しかし、大切なことは私たちが一人になっている時、神の御前にどう生きているかなのです。家庭に戻った時、家族を愛しているか。その心の思いに至るまで、神の御前に誠実であるかどうか問われてくるのです。私もディボーションの時を持っています。その時に気をつけなくてはならないのは、祈りがワンパターンになっていないかどうかです。毎日同じ言葉をつらつらと述べるようになり、心がこもらなくなっていく。聖書通読をしながらも、何も頭に残らない、別のことを考えているということもあります。神が今この自分に何を語っておられるのかを真剣に聞く耳が自分にあるか。語られたことに全霊で応えていこうという意志を持っているかどうかを、自らに問いかけなくてはなりません。

私が朝一番に読んでいるのは、加藤常昭先生の『祈り』という本です。この本は、祈りとは何であるか、人はどのように神に祈ればよいのかを教えてください。御言葉から祈りが導き出されるとはどういうことかが分かる良書です。その祈りの言葉に自分を重ね合わせるように努めています。しかし、私はそれすらも軽く読み流すことができてしまう自分がいるのを知っているのです。読むことがただの習慣になり、「今日も読んだ」ということに満足してしまう。一つ一つの物事に心を込めないで生きていくところに、律法主義の影があります。

奥村修武がマルコ福音書講解説教の中で次のように言っているのが心に留まりました。「クリスチャンになるとは、自由に考え生きようになることを意味する」「私は聖書を読むようになって、人生百般につき従来行われている事柄につき、根源的問いを発するように教えられている」。

クリスチャンであるとは、神の子であるということ。神の子は神が創造した一つ一つのものを見て喜びます。子どものように新鮮な心で、人生というキャンパスに描かれていく絵画を見て楽しむのです。その心が自分から失われていないか。神との生き活きた交流があるかどうか。どんなに小さな働きも心を込めて行なっているかどうか問われているのです。

## 【結論】

パリサイ人・律法学者が陥った生き方は、私たちにも起こり得ることです。怖いのは、彼らが自分の問題に全く気づいていないことです。彼らは自分の生き方が正しいと思っていた。むしろ、イエスこそおかしいことを言って、民を惑わし、異端を広めていると思っていた。主イエスは律法の真髄を教えておられたというのに。人の目は自分の知らないところで閉ざされていくものです。私たちの目はどうでしょうか。毎週、主より語られる御言葉によって揺り動かされ、自分の生き方を根底から問い直したいのです。私たちの内から「律法主義」を締め出し、「心の宗教」を取り戻したいと思います。

## 【祈り】

人に自由を得させるため、律法をお与えになった神よ。ユダヤ人が陥ったと同じ性質が私たちの内にもあります。律法主義は、日常生活にも、宗教生活にも入り込みます。私たちが習慣化したことが、かえって命のないものになっている危険性もあります。どうぞ、一つ一つの物事に喜びを与えてください。ディナーションも、食事も、仕事も、すべてをあなたとの豊かな交流の中で行なうことができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
人の自由、人の幸せを願って、聖なる律法を定め給うた、父なる神の愛。  
律法主義の本質を見抜き、愛と真実に生きる道を示し給いし、主イエス・キリストの恵み。  
神の子の生き方のすべてに喜びを加え、生き活きとした人生を歩ませ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。